

三昧の巻

宗要の巻

前篇

- 念佛三義……………一
- 見性と見佛(禪と淨)……………五
- 無礙光……………七
- 撰擇本願……………三
- 往生……………二七
- 若衆生ありて……………二九
- 斯光……………三三
- 遇斯光……………三五

後篇

- 意志垢……………二六
- 我執……………二九
- 清淨光……………三三
- 歡喜光……………三三
- 智慧光……………三三
- 離思光……………三三
- 無稱光……………三三
- 念佛三昧玄談……………三三

念佛三義

鎮西流には請求。眞宗感謝。當流三昧。

念佛の要は佛心と衆生心との合一する所にあり。此に救済融合靈化等の功能あり。念佛三昧を宗と爲し往生淨土を體と爲す。佛心と衆生心との完き結合する時に佛心は増上強きが故に衆生心を同化する。譬へば闇室に日光入る時は闇去り明來るが如く、如來の日光は衆生の心の闇室を照す。凡夫闇黒の生活が轉じて光明生活と爲る時一切悉く變化す。

佛生合意する處に靈感あり、生命あり、力あり。

鎮西流は此正合を一を未來に期し佛は西の彼岸に置き自己は東方の穢土にあり。助け給へと常に念佛し念佛の數を定めて歩々に進む。佛生の結合は始より終にありて未來にありとし、臨終の夕に始めて結合す。故に平生の念佛は臨終一刹那の結合の契機

を正當にせんが爲にす。若し此一刹那にして契合せざらんか生涯の無數億萬の念佛悉く徒勞に歸す。平生には我と彌陀とは結合せぬ。聖靈感もなく妙味もなく唯努力是我等が本務と爲す。

次に眞宗の念佛は衆生佛性もなく力もなく唯有するものは罪惡の充滿する處只地獄に墮落する外なき聚合煩惱に過ぎず。斯る罪惡の凡夫の爲に阿彌陀五劫に思惟し永劫に苦行す。偏に是我等が墮獄の罪を贖んが爲なり。我等を救済するの願行已に十劫已前に成就して攝取の光明常に衆生を照し給ふ。我等如何に罪深きも彌陀既に贖罪の功成す。彌陀の願行偏に一人の爲なりと。彌陀の願意を無疑、無虚仰いで信受して一に此眞義を會解する時に歡喜無量。此歡喜の一刹那已に彌陀の本願我物と爲る。十劫の正覺を當念に獲得してよりは已に正定聚身は此此に在ながら已に不退地の聖衆である。故に已に救はれたる身なれば唯已に救はれた過去を追回しては感謝の念佛すべしと。是眞宗の過去追回感謝念佛なり。彌陀と衆生との合一は已に歡喜一念、爰に至れば已に十劫已前に圓滿に成就したる我等が救済なれば敢て進むべき機能を要せず、彌陀の大願に歸すれば罪惡も敢て恐るるなし。只々報恩念佛すべし

鎮西は未來に合一を求め、眞宗は過去已に合す追回報恩の外に念佛の要なしとす。過ぎたるは及ばざる如く、何れも未來と過去とにのみ中心を立るが故に正中を得ず。當流は其中流に立て而も兩端を統ぶる念佛である。然れども彌陀と衆生との合一を得る迄は鎮西の如く専ら若しは念佛し若しは讚頌し、師友知識の指導を仰ぎ、中心主義なる彌陀との正當の合一を期すべく、其合一に於ても、一面より見れば、得たる當念に全體合致す、眞宗の如く平等の方面、一面より見れば行布門にて鎮西の如く如來光明中、に在つて向上進趣す。

永劫に彌陀と離れず、過去を追はず、未來を、念々唯即今の當念、永に、彌陀と合一す。常に彌陀無限の泉源より自己心中に混々とし靈泉湧出す。是念佛三昧である三昧とは過去に非ず未來に非ず、即今當念彌陀と合す。念々唯當念假令無量劫を経る

とも常恒の當念彌陀と共にす。彌陀は絶對無限の靈徳あるが故に、彌陀の中に在て我等は未來々々に向け當念を離れずして益向上す。已に得たる過去を追回しては偏に彌陀の大慈なるを憶念して報謝す。

常恒に過去未來を統ぶる現在當念を尊しとす。念々當念彌陀に在りて彌陀の靈力を我當念を以て實現す。

彌陀は絶對無限の靈徳なれども我當念を離れて感ずるなく、無限の靈力は我當念を實現す。

當念を離れずして念々向上す。未來々々々々に向つて前途に希望斷ゆる事なし。高遠なる理想は當念を離れず實現せんとす。彌陀は常恒不斷の大活動態なれば念々常恒に當念を尊ぶものに靈力を施す。

吾人は太陽の光熱が千萬年の照したる昔の影を捉へかたし。また明日の光を待つより即今當照の光を用いて満足す。然ればとて過去の恩を報せざるに非ず未來の力を要せざるに在らず。唯現在即今の當念絶對無限の光を少き吾人の心意に使用する。

充滿されて不足なければなり。
即今當念彌陀合一の念佛。

之れ靈感である。
絶對無限の靈光中の念々、自己に實感しつゝある當念の當念は無量壽にして永遠に斷ざるものと信ず。

見性と見佛（禪と淨）

佛敎の宗派多々ありと雖も、歸する處二性に過ぎず。自力と他力となり。自力とは自己を發展して宇宙の大我と一致し、他力とは一大真我に小我を投歸没入す。甲は自己心中に宇宙の本體を認め、乙は大我中の自己とし、大我小我の調和する處は即ち一なり。

甲は理性に本づき乙は感情を主とす。甲は宇宙の本體を抽象的に唯一の精神態としてこれを自性天真とす。個人の自己最終の根底が即ち宇宙精神なれば、自己の本性を發見したる時に宇宙の自性を見得す。此自性より深き玄底あることなし。宇宙萬有は此自性を最終の根底とすればなり。故に此自性を見得する時に正覺を成じたるなり。正覺とは自性を證得したるに外ならざればなり。一切萬有は自性の大用現前のすがたなり、自性の用を離れて萬有なければなり。故に自性を見たる時即ち成佛と云ふ。

淨土門には宇宙の自性天真を阿彌陀如來と名づく。如來を實體より見れば法身佛にして宇宙心體である。また如來の大智妙用より如來の智慧と大用とは法界に周徧しぬれば無量光また無量壽と名づく。

また萬徳圓滿の表現として相好光明を現す。相好光明等は如來の智と用との顯現なり。

故に相好を見るものは即ち智慧慈悲の心象を観る。心象の體は法身實體なれば、また如來の實體一大心をも見ん。

禪に見性を期せざる者は禪門の蠱賊として之を排斥すべきものなると同じく、淨門に見佛を期せざるものは、徒らに名を淨門に假りて眞を濫す賊なりと云ふべし。見佛を臨終の夕を以て初めて見佛を待たば何の爲にかは（以下斷絶）

無礙光

解脱無礙自由の生活

光明生活に入る心理

無礙自由

宗祖の人格

宗祖精神生活

宗祖は如來、光明の中に無礙の精神人格もすべての碍業障等の障碍物は如來、光明に同化せられて、圓滿なる人格を形成し、本質内容を圓滿にして、宗祖と共に行住坐臥、精神生活を共にして祖の弟たり子たり。

私共は天性に約束せられ、貪瞋癡等の煩惱に絆され、業に繋かれ、世界動機なる名譽に利欲に種々の煩惱に縛られて、道德と不道德とを意識しながら自ら自己を解脱して自由となる事が出来ぬのである。或は他を羨み嫉みまた自らの失策までも他人をとかめ恨みとするのはつまり業に縛られ煩惱に結ばれて居るからである。

如來の光明によりて解脱靈化する時は、其人格に（ ）精神生活に於て一變し、人格革新し業の牢獄を出で囚を解いて精神が別天地に出でたる如きの觀あり。

之を如來無礙光中の生活といふ。

人間には天性何人にも之を解脱せねばならぬ自然の素質が生得に持つて居る。恰も寶石にも琢磨せざれば光を放たざることく、一は動物の天性として此自己保存等の慾より原起りたるにてまた人間となりて肉慾我慾により、また遺傳の素質自然の氣質また習慣性癖あり、人類には、誠に少なくて四十七癖といふ。其すべての性癖習慣性等は人格上、道德上好くないと自ら知りながらも之を自由に捨てることの出来ぬのは、

業に習慣に縛られて居るからである。自ら之を解きて直すと云ふことは自ら難いのである。克己心の強き人は立派に成功するけれども普通の人には難いことである。或女學生が繼母の手に家庭の冷遇を受けて居る爲に何でも（ ）ではならぬといふ習慣性であつたが或婦人の深切なる信仰の薰陶の結果は心も解けてつひに家庭に於て其繼母までも感化するに到つた。

宗祖の道顔を拜せよ。無礙圓滿に解脱して其内容に於て自己の煩惱をほどけ、何にも圓滿なる人格實に慕ふべし。欣慕すべき感情に一艘の結びも認められぬ。

宗祖は世の名譽にも權利にも榮耀にもすべての結縛を脱して超然として卓立せる宗祖の人格を仰げよ。做ふべし學ぶべし。

如來無礙光中の人格美はしき無礙光中の精神生活知るべきのみ。

斯く無礙自由にとけくといふ光明は法界に充滿せるのに世の中の人々はいかなれば自から捨て、此光明に接觸せぬ。若し此光に遇はば三垢もほどけるすべての結縛を切りほどき給ふ故に、ミタの利劍をもてきりほどけて自由の精神となりしもの高尚なる精神生活、行住坐臥ミタと共に、ミタの靈を以て衣食住をなす。是しかしながら無礙光中の生活といふべし。

宗祖と共に住し共に生活せん。

宗祖は無礙光中の人格にして、身は世界にありて心は世界に束縛せられず。名譽も權利にも榮耀にもすべての人性の弱點は皆世界動機に縛せられて居る身に非ず超然として獨り物表に出で、無礙光中の生活なり。ミタと共に住し坐し臥し、ミタの靈を食ひ法喜禪悅を味ひ、ミタと共に三昧の衾を重ね、ミタと同棲し、しかれば吾人も其徒たり精神生活宗祖と共にせん。ミタと同棲し衣食共にせん、是無礙光中の生活なり。

選擇本願

選ばれたる人と捨てられる人、選ばれたる人は現身に無礙光中に宗祖と共に精神生活し、身は此土にありながら神は淨土に逍遙す。

如何なる機類が被選資格を有する。三心具足するものは被選資格を有するものとす。

「往生は世に易けれど」

往生は無生の生にて之が顯はれたる精神は即ち無礙光中の生活と名づくるなり。ミダの子たる靈性が顯はれたる人なり。本來人の最大本性は如來性を自性としてある故に其本性の顯はれさへすれば此まゝ無生の往生を遂げた人なり。自己の本性の顯れが往生である故に、往生は難い筈はないけれども、云何せん、如來の子でありながら其外部に覆ふ所の二性に碍ぎられてそれに縛せられて往生ができませんのである。

それは斯うである。二性とは衆生性と世界性、衆生性は動物共通の性欲只肉的生活のみを重んじて此營養生殖等の欲に縛せられて、生活を爲すに没却してしまふ。次に世界性、因縁因果の關係に世界動機の名譽利欲の爲に絆され、また老病死苦八苦等の三界の煩惱に束縛せられて無礙自由の人となる事が出来ぬ。

人は人間の子であつてまた世界即ち天地の子である。人の子であるから親と同じく老病死苦は免れぬ。世界の子であるから無常空苦は遁れられぬ。これに繋がれてゐる間は無礙自由の人となることは出来ぬ。

人彌陀の子たる靈性は至誠なり。人の天性は虚偽なり。世界性は相待的の虚に對する實はあるけれども、それは絶對の眞實にあらず。いかにとなれば人の生れて假令百歳の命を持ちても時刻れば必ず死す。故に人は世界相待的の生は必ず死が離れぬ。眞實絶待は本來本有の自性にして無生、此身の絶待自性の顯れ來るを生と云ひ實は本有無(生)である。

本有無生は絶待である。絶待はミダの本國である

撰擇本願念佛

阿彌陀佛といふより外は津の國のなにはのこともあしかりぬべし

(一) 宗祖開宗の主眼こゝに在り

(二) 祖が多年の腐心こゝに存す

(三) 宇宙の中心を得たり

(四) 三世諸佛の精粹

(五) 祖は一切佛敎に選擇したるは實は彌陀に擇ばれたるなり

(六) 祖にして自餘の非なるを斷定すべし、自ら多年比較研究の結果なればなり。

宗祖と他祖との開宗の得法の異

宗祖は一切佛敎中撰擇自得の法

他師は師資相承法

祖は撰擇

他祖は依有緣法

勝(約法) 萬德所歸彌陀一佛

所有四智三身十力四無畏等一切内證功德相好光明說法利生等一切

外用功德皆悉攝在阿彌陀佛名號之中屋舍名攝棟梁緣柱等屬具

易(約行) 易行。行住坐臥不擇

徹選擇 但以念佛三昧別名選擇有^二何證文^一 耶答曰菩薩念佛三昧經云此念佛三昧過

去諸佛之所讚嘆也乃至一切如來之所印可也乃至一切諸佛之選擇也乃至一切諸佛之財寶

一切諸佛舍利一切諸佛體性

今解一

念佛三昧。名體不離の名號は彌陀の種子なり、精なり、核なり、聖靈の核なり、一切萬法は枝葉なり、外包なり、皮殼なり。

念佛三昧は生佛合體、陽春櫻、花咲匂、時雌雄兩藥合體するなり。雄の花粉精雌藥に交感する時、雌胎宮に入る。此精偉大なる勢力ありて無數の細胞を聚めて精の生命を保護す。念佛三昧は如來の聖靈應を交感す。こゝに靈的精靈分子の靈的細胞が衆生の信念即ち大脳の中心なる靈樞性に入胎する時は是靈的生命の核にして無量壽の胎兒なり賤女宿輪王王種の胎あり。

彌陀身心遍法界、彌陀聖靈的分子は法界に周徧す。入胎すべき卵子に靈的卵子熟すれば必ず靈感入胎す。

胎兒に養分を要すると同じく、人の心生活の中に就いて靈樞性に豊富なる養分有するものは、聖胎健全にして益々靈聖發達す。

名號は如來の聖種なり。靈生命の元的分子なり。核なり。靈的分子の生理的機能が構造し、生理作用を爲すに至れば即ち靈の核となりしなり。此に偉大なる力ありて、不斷に靈的養分を吸収して、自己を増長せしむ。

名號は約レ法、體を証表する名

念佛三昧は行に約す、衆生心に如來を念する時、如來の靈應を感じる契機なり。

種子には根莖枝條花果、悉く其性分に依能として有す。根莖枝葉等には其能なきが如く、本願名號は如來の聖靈分を具す。其他の萬法は、枝葉に比ぶべく、依つて其勢能の異なること知るべきのみ。

宗教過程 信仰生活 三階

極樂へつとめてはやくいでたゞば

身の終りにはまいりつきなん

往生

淨宗、一大事往生にあり。

念佛三昧爲レ淨宗、往生淨土爲レ體。無生の生、諸宗の成佛の義生は精神生命人格の中心の核、生は肉的生命即ち自我

自我の三階—眞實永遠不滅の自我

外胞我—天性 皮殼を我と謂ひ、中心眞髓の自我を自覺せず。

念佛三昧とは生佛の交渉、如來の靈應(聖靈)が衆生の妙感に涉り、相入する事、喻へば植物の春期爛漫と花開く時、雄蕊の花粉が雌藥に感じて、胚胎する如く聖靈感が人の靈性に感應してこゝに胚……

自我開發三階

天性我 皮殼中の核 動物共通我

理性我 相対的理我 人間我

靈我 永遠の生命靈核の顯現の靈我

靈種子受けざるは雄蕊花粉受るなき如くむだ花、鶏卵の精なき卵……

若し衆生ありて

衆生を分ちて三類とす。一、天然の(未だ光にあはざるもの)二、黒闇態(光に背きて邪定聚)三、光明態(光に遇ふ正定聚)

不定聚とは天然の人は即ち自性清淨なる性能を元來具有すれども無明煩惱に覆はる、故に根本的惡欲望即ち惡衝動有せり。天然性格の衝動は根本無明俱生の感煩惱の種子具に有す。善惡の性能は俱に具すれども天然性格は純朴なる幸福本能即ち肉慾幸福主我が根本なり。此主我幸福主義は惡衝動の根本なり。遺傳の因縁によりて各自其性格に特質ありと雖ども天然性格は善惡の兩性能俱有するが故に善惡の刺激によりて何れの方にも開展すべき性を具す。天然の未だ光に遇ざる不定聚とす。二、邪定聚は黒闇態生活とす。即ち邪惡の聚類なり。天然純朴にして主我慾主義未だ開展せざる限は善惡共に平均、本能に盲從せずして己に利ある限りを利用し其根本惡の面目を現

し来る。主觀的道德の光に背くを邪と云ふ。客觀的に道德光に乖くを惡と名づく。主我幸福主義は惡の根本なるを以てこれを恣にして道德規律を破壊するを惡と云。而して主我根本惡は人の普通天性にして其變態なる遺傳の惡習は人々の特殊の惡とす此根本惡主我、充分に力を有し道德規律に抵抗し自己の良心を覺すべき眞理の光明を棄却し只自己の主我を主張し我意に利ある詭辯を用ひ益々惡を増長し牢固にす。惡の最も牢固にして良心の聲に應ぜざる我欲主義は病的に墮落したる惡衝動あり。惡習慣は已に性をなして惡弊症になり精神病的變質を生じ已に惡の遺傳素質となるに至る身體と同じく精神にも健康なる人は少し。其病態が實行に障なければ之を健全といふのみ。

人の根本に惡の性情を具するも病的變態となりては一層甚しく根本惡は之を制すべし。墮落の惡、病的惡に至つては惡性格となりて如何とも除き難もの、之を邪定聚と云。即ち光明に反背ける黒暗態生活なり。……

若し衆生ありて

人を分て三類と爲す。一、不定聚。二、邪定聚。三、正定聚。

一、不定聚とは天然的精神、未だ光明に遇はざるもの。人は悉く自性清淨なる性能を具有すると共に無明煩惱に覆るなり。譬へば粃米の糠粕の皮殻ある如く眞金の鑛垢の中に在るが如く、善惡の種子俱有して若善縁に遇ば佛性開展し神聖的精神となり惡の刺激によれば惡性能發展して黒暗態生活に入る。天然は根本の幸福主義の劣態なり。本能に盲従し純朴にして未だ主我開展せざるを、何にもなるべきものなれば不定聚と名づく。善惡邪正いづれにもなるべきものなり。

二、邪定聚。光明に背けるもの。之を黒暗態生活と爲す。即ち邪惡の人。其本は天然規律の幸福主義より出で本能に盲従せず、主我主義即ち我慾を呈し己に利ある限を利用し其根本惡の煩惱より出でます。惡を牢固にし自ら許して是とし敢て改ることを用んとせず。是高等の目的より言ば脱却すべき性能を除かざるのみならず却

之を増長し肉慾我慾を恣にし内心邪にして外身口に惡を造作す。良心を醒覺する彌陀の光に背き黒暗の中に主我を主張し根本惡の上に惡習慣病態惡症と成り、つひに治すべきからざるの惡性格に至る。之を邪定聚即ち黒暗態生活とす。たとへ三惡道に落つべき邪惡に非ざるも更に信仰なく主我を執して解けざるものもこれに屬す。

三、正定聚。光明にあふもの。光明態生活と名づく。天然具有せる無明及び罪惡の皮殼の主我を脱し、すべて脱却すべき素質を脱し解脱靈化の精神として清淨自性顯はれ完全なる道德的生活となる。經に斯光に遇ふものは三垢消滅し歡喜踴躍して善心生ずとは是なり。此光によりて知情意の三能に於て垢汚を脱却し知力には不正如不眞理知を滅して眞理を覺るべき正知見を開き、心情には不靈福態の煩惱を脱し靈福に充たされ意志には世俗情操主我執着の垢を去りて聖靈菩提心となり、斯の如きの精神態は決定して無上覺に至る。故に正定聚とす。

斯光

光に古來色心の二種を説しも今は宗教必要上直接なる精神態光のみを。

光の性と能。性に三態、神靈態、正義、恩寵。

斯光の本質は彌陀一切智と一切能との势能にして、善く法界に周遍して實在せざる處なく、體即用にして體は智慧にして势能を用とす。即ち智慧の势能を光明の用とす。势能の智慧を光明の體とす。一點の雲なき如きの青天に日月のかどやく如き。光を性質に就て三種に分つ。

三性、神靈態、正義、恩寵。

神靈態とは其势能の智慧なり。神の神靈態は絶對理性にて神聖圓滿なる道德の光明にして此光に合ふものを自ら神聖なる道德的行爲をなさしむ。此光能衆生を自律的ならしむ。

此彌陀の至精至純なる絶對的理性の光にあはば自己の良心即ち理性を醒覺して
 道德秩序を發見せしめ神聖なる彌陀の聲を認識するが故に道德の根底は皆彌陀の光り
 なるを見る。彌陀の神聖なる光に合ふ時は自ら侵すべからざる心をおこし、この光が
 良心を常に照して道德秩序は自律的に無規定に行はる。此神靈の光りは神聖的制裁
 として無規定に道德行為ならしむ。

此光は神聖態を建設する契機なり。此光衆生の精神を神靈同化する。

道德指導の命令的性質あるを以て彌陀神靈の光と見ゆ。良心の裁判の聲には正義と
 顯はれる。

道德秩序の絶對根底は即ち絶對理性なる神靈態なり。然れば光明の本質は是絶對
 理性なり。

正義。彌陀智慧の勢能にして此光道德秩序を知らしむ。彌陀智慧の光りとは絶
 對理性神靈態なれども道德秩序を正にするに障礙をなすには其不正を雙へ照して
 其不正の黑暗を破して正義の光を立つ。正義は公平無私なる内心の司法者。

客觀的正義としては彌陀の絶對理性の勢能即絶對

佛知見を與へて正義ならしむ。正義は人の宗教。自己の良心にあつて正不正を双照
 して正知見を開かして正道に行かすむ眞實無偽なる理性態なり。

遇斯光

知情意の三能に感合して此三能を資益す。彌陀の光り即ち恩寵は一體なれども之を
 領納せる機能によりて其用を異態にす。この彌陀の恩寵と人の信仰との感合は水月同
 交の關係にして之を感する處の機能は人の精神の内面に於てす。至心信樂と彌陀欲望
 の精神が機能一致の状態は自己の心象に實現すべきものにして諦かに此が實現を證明
 す。之を啓示と云。即ち佛知見開示の義なり。

智の啓示に三種あり。一に感覺的啓示。感合の順序に先づ第一に直觀に意識に現

するものは感覺的なり。導師觀經の疏に諦かに日を觀するに其利根の者は一坐に即ち
 明相現前を見る。境現する時に當つて或は錢の大的如し。或は鏡の面の如し。彼瑠璃
 地の内外映徹せるを見る。或は白毫の光を見或は寶像の相好光明を見るあり。或は
 大身を現じ虚空に徧滿し丈六八尺等を觀するあり。之らはすべて感覺的啓示と云ふ。
 是定中意識の色相なり。

次に寫象の啓示。彌陀の光を觀する時は彌陀無塵の相好妙色莊嚴を觀見すれば、進

んで彌陀の内面内證を觀す。謂ゆる四智十力等なり。彌陀大智慧光明普く法界精神
 界を照し神靈態正義恩寵等無極にして衆生を攝取したまふ。彼の神靈態を觀すれば絶
 對理性の精神態大圓鏡の炳現す。神靈威嚴の精神態に對すれば侵すべからざるの想を
 起し至精至粹純一無雜の至眞至靈態なり。純理性の精神態彌陀の光明は正義と不
 正義を照しわく。即ち選擇本願の意を表し彌陀は十智力を以て正不正を照見し其不
 正を措て正義を撰取しまた無縁の慈悲の恩寵を以て衆生を攝したまふ。また佛智不思
 議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智を了すとは是寫象的に彌陀の内證を觀察し觀
 成じて彼の神靈態と相應すること機能的に一致したるを遇斯光と云ふ。

三、法身觀念的啓示。彌陀の内證を寫象的に觀すれば次に彌陀の實體を觀すべし。
 自性身は心地觀經に其自性身は無始無終にして一切の相を離れ諸の戲論を絶す。

無際にして凝然常住なり。消極としては非空間非時間態、積極としては遍
 空間遍時間、無盡の法門悉く圓備して彌陀に在り。縦にあらす、横ならず。一に非
 す、異に非す。實に非す、虚にあらす。亦有無に非す、本性清淨心（絶たり。之
 を法身現體と云ふ。

解脱

人の感情には天然としては苦毒と罪惡との垢穢ありて之を苦諦集諦と名づく。生の
 苦は天然幸福主義には苦毒と感じ宗教の意識よりは苦の本は煩惱なりと現す。人は本
 能的幸福主義にしてこの肉慾我慾の満足を求めて之が爲には全力を注ぐもいかゞせん

三苦常に心身に逼る。

二八

意志垢

一、卑劣情操

世俗情操といふて金に鑑垢があるごとくにて何となく淺ましくいやしくて高尚な志操も遠大な希望も發らず、彌陀に化すべき菩提心願作佛心などは發らぬのである。靈光によりて此情操の垢穢が除けば鑑垢が去りて金性が顯現する如く高尚なる思想も意志が磋磨して聖靈態菩提心となり願作佛心とは願度衆生心、願度衆生心とは即ち更生の心なり。

二、世界的動機

本來婆娑執着とか現世祈りとか名づけたり。意志に人は高き宗教修養なければ自ら平常見聞する處唯この物質的世界の外に神の國に入る觀念もなく常に見聞する世界的動機の外に動機なければ自然とそれが慣習性をなして唯淨世の中に幸福を追ひもつこの外に意志に満足を與へるものなきとおもふにいたる。是うきよにみたる垢と云みひかりにて之垢を除きされば彌陀の意志に靈化して彌陀の目的を自己の目的として彌陀の意志實現をいのりつつ實行をなして自己は彌陀の器具としての生活たるの一員たることを意識す。彌陀の目的とは一切衆生の精神界をして至眞至善の美天國たらしめんとすの意志なり。

我執

主我執着にして人は本能幸福主義のまゝに生育する時は我慾のみ主張し自己に利あらんかぎりは他の障害をかへりみざるにいたる。道德的の害即ち惡とは我慾を本とす。

靈光によりて深く自己を返照すれば主我の非理なるを觀じ我執を捨て彌陀の生命の

二九

中に入るときは自己離脱して靈光に靈化し、神の中の我なるを以て彌陀の意志實現に力行するときは、我慾の惡意は轉じて至善即ち道德的情操となる。

三〇

汝らは是植物と動物の生活の外に迥に超越したる聖靈の生活あるを知らず。いかでか此神光に感合せる妙遇を稱説して感知せしめることを得べけん。珍膳いまだ食せざるものその味をしらんや。いかゞこの感合の妙遇をのべん。之が消息を洩すべけん。植物は暖和の春の日に爛漫たる麗色を呈し復郁たる妙芳を發して無意識ながらに天機感合の美を顯はし人は感情を有せる高等動物なれば窈窕たる淑女羅縠思服の春巫山の夢の中に動物的生活の感合を見る。あないやし。何ぞ肉地迷情の比例を以て神靈界感合の妙境をのべん。旻天無極を超越したる眞靈界至眞至善、眞理虛靈の神靈光明に接せんと欲せば天然機制の我を亡じ絶對的彌陀眞我的神靈界に投じ眞實最深の我即ち入我々入、彌陀眞我的外に我なし。水を海中に投ずるが如し。風中に棄を鼓するが如し。此妙境に入るや五大皆空、言語道斷、八面玲瓏、歡天喜地、導師曰く「定中に在りて此日を見るとき三昧定樂を得て身心内外融液にして不可思議なり」と。又曰く「想心漸く微にして覺念頓に除き、正受と相應して三昧を證し云々。

此境たる天然的心理を超越して受想行識斷盡し我亡じ洞然として心華爛熳として積郁たる香氣を發し玄妙不可思議なり。一たびこの妙境に入り心機開展し已ぬれば常に念に隨ひ意思によつて應現す。此經に教祖が彌陀三昧の中に彌陀の靈光と交感して之に滿さるゝ内容が自ら外貌に現はる。即ち爾時世尊諸根悅豫し姿色清淨にして光顏巍巍たり。尊者阿難佛の聖旨を承て即ち座より起つて偏袒右肩し長跪合掌して佛に白して言さく「今日世尊諸根悅豫し光顏巍巍たること明淨なる鏡のかげ表裏に暢るが如し。威容顯曜にして超絶したまふこと無量なり。未だ曾て殊妙なること今の如くなるを見たまつたす。云々と

是彌陀の恩恵が教祖を感せしめ其反映の光りが阿難及び大眾に及ぼしたるのみ。人

三一

未だ自ら直接に靈光に感接すること能はざるも已に心華開展せる人の内容の自ら外貌に顯はるゝを見て其融合安立せる態度を識るべし。

已に彌陀に安立せる心情は從前の不靈福の感情さりて常に自ら靈福に満さるゝ故に意志の靜安として顯はる。世間八風の爲にも動搖せられず。心情安穩にして志氣寂靜なり。世の六塵の爲に誘惑せられず。肉は機制の束縛を免れざるも靈は無礙光の中に在りて自在なり。肉は相得因果の約束に縛せらるゝも靈は絶對の彌陀に解脱す。

清淨光

是よりは個人人の心理に蒙る光にて初め感覺に受る光り。

六識に受る光りなり。人の感官眼耳鼻舌身意の感、六識は色聲香味觸法の六塵に染汚せられて、消極には六識の汚染五欲等、積極には感性を清淨にして、法華に六根清淨と云ふ如し。清淨光によりて感性が清淨になる時は心は淨土に栖みあそぶ。七寶の莊嚴は心の眼に感見し微妙の樂音は清亮。所謂目に諸の不淨を視す意にもろゝの不淨を見ず。

聖徳太子が、風人の月下に我を抛ち萬邪みな忘れて聖理にかゝはらざる如し。期せずして諸佛の情となり菩薩の道を成すとは之なり。

歡喜光

是感情に蒙る光なり。人は喜怒哀樂等の情に於て感情に垢ある時は野卑なる感覺を以て感情の歡と感じ不正なる憤を發し事に迷つて痴情の爲に哀傷し慟哭し愛憎も必ず正しきに非らず。

靈光によりて心情の垢穢脱すれば内容常に寛容にして志氣寂靜にして心情安穩なり靈光は春の日の如くに新鮮なる活氣を興へ皎月の如く煩惱の熱を除て清涼ならしむ。天の如く高尚なる理想を興ふ。天樂の如く常に歡樂を興ふ。浩氣の如く神祕的平和なら

しむ。常に微妙の融和和樂をう。この歡喜の光や歡ばしきと謂はん哉。樂しきと謂はん哉。將尊きといはん哉。顧みれば肉の快樂は是犬の骨を咬むが如し。疥を痒て快しと感ずが如し還て壞るゝ時は却て苦と爲る。常に微妙の歡喜を以て心神に充しむものは獨りこの靈光のみ。

智慧光

人に根本無明あり。また世智は却て眞理を覆ふ。經に人みな自ら智ありと謂へども自ら生の從來する處を知らず。死の趣向する所を知らず。未だ一心の根底理性を盡して自己の根底に冥想して自己の源底を悟らず。世俗の不正の知と世智を以て自ら智ありと謂へり。甚だ惑へるなり。智慧光を觀せんと欲せば自己一心の根底に意を注め精を盡し性を盡して止まざる時は廓然として純正理性即ち彌陀の智慧光を發見することを得べし。其理を究め性を盡して自己の根底に至らば自己の心性本是彌陀の分身なることを認識することを得べし。智慧光は即ち神靈態なる勢能の智慧にしてこの智慧光の力用として我らを正義ならしむる恩寵の光なることを知らん。

不斷光

意志に蒙る光。人は意志に野卑なる情操と世界的動機と自我執着の垢ありて最完全なる精神生活をなすこと能はず。たとへ少しは理性良心を惹起すも意志薄弱にして世界動機の爲に驅使せられて意志をして煩惱の奴隸となすにいたる。此光を蒙る時は意志の垢穢し不斷なる意志堅固なる道德情操として精神と神靈なる生命として不斷に活動せしめ聖靈菩提心を維持して金剛なる意志勇健なる志操として退轉せずして無上覺に到らしむるものは此光なり。

清淨光より不斷光に至るまでは人の心理に啓示によりて此靈光を直接に感合し融合し靈化せるが故に自己の心象に實現する限りは之を認識することを得べくもせば自

己に感應したる分のみなり。形而上彌陀の理義は人の智力の及ばざる所。二乗及菩薩も測る能はず。

彌陀智願海 深廣無涯底……三賢十聖難測之

難思光

不可思議の義。體と用とに就て難思を論せば、

彌陀の本體は本真如なり。真如とは信論に一切法從本已來離言說相、離名字相、離心緣相、畢竟平等、無有變異、不可破壞、唯是一心、故名真如乃至此真如體、無有可遺、以一切法悉皆真故、亦無可立、以一切法皆同如故、當知一切法不可說不可念故名爲三真如。實體は不可知的なり。思慮分別を以て之を量らんと欲せば却て眞理に乖く。有限を以て無限を測り現界を以て本體を量る、たとひ比量的に等きのみ。いかでか眞理を知らん。

信論に『自然に不思議の業種々の用あり。即ち真如と等しく一切處に徧す。又亦用相の得べきこと有となし。何を以ての故に、謂く諸佛如來は唯是法身智相の身、第一義諦、世諦の境界有ることなし。施作を離る。但衆生の見聞に益を得るに隨ての故に説いて用と爲す。

衆生よりは其體を認め其用のしかるゆゑんを究め知ること能はずして（）るも眞實に之を信じ之を念する時は不測の妙用ありて解脱靈化の妙用を得唯仰て信すべきのみ

無稱光

起信に一切の言説は假名にして實なく但妄念に隨つて不可得なるを以ての故に眞如と言も亦相あることなし。謂く言説の極り言に因て言を遣る、乃至當に知るべし。彌陀の難思と無稱とは體に就ての妙用に就て云なり。

彌陀甚深難思の妙用は果分不可説の分齊

一切諸佛を化作して常に十方の衆生を度し無量の諸佛無量の名字種々の形相を示して恒常不斷に一切衆生を度す。
實を剋して論すれば十方一切の諸佛法報應の三身悉く無量壽極樂無爲眞理の靈界より化出して十方の衆生を度す。故に十方の諸佛は悉く本地の最尊を讚美稱揚して衆生をすゝめて其本源に歸せしむ。

念佛三昧向果立談

(大正五年夏祖山よりの御歸途名古屋崇徳寺にて)

- 一、教之階位
 - 通互宗教三階
- 一、自然教
 - 多神教
 - 一體教
 - 自然の念佛
- 二、超然教
 - 一體教
 - 超然的淨土教
- 三、圓具教
 - 統兩教高等精神教
 - 圓具的淨土教
- 二、教之神格
 - 一 神教
 - 二 汎神教
 - 三 超在一神の汎神教
- 三、大乘佛教教祖三昧中説
- 四、本佛と迹佛
- 五、彌陀實體と化用

彌陀實體………絕對大靈（眞如）形而上實體論の要求

彌陀の化用

宇宙最尊の彌陀

三昧對象の彌陀

贖罪的の彌陀

傳承的の彌陀

神話の彌陀

六、教の宗趣

念佛三昧爲宗、往生淨土爲趣。

見佛往生を宗致とす

見佛二機 一、現身——勝
二、臨終——劣

往生成佛——佛性顯生の生 全生命の顯現

見佛は其兆候

禪の見性成佛と淨の見佛往生

靈性と理性と天性

諸根悅豫（機能調節）

諸根——眼耳等官能、五根、五臟六腑等の機能（三十二根）
悅豫——彌陀靈光三昧、融合靈感、法喜禪悅、三昧妙樂、

不_レ同_二凡夫歷緣對境轉變無定_一。

姿色清淨

（氣息調節）

神氣常清——靈血永淨、金色外塵、不酸錆生、
内三昧融合——潤液不可思議、氣血順調、快活怡々、故姿色清淨

光顏巍巍

（腦髓統一機能調整）

三昧定意——求心遠心中間三部是全身、
統一主宰——神經等最元妙威神力あり、

諸根悅豫以不_二毀損_一

光顏無異

提婆殆害木槍難、外道迫害
閻王火坑難、旃沙彌女難、
提婆羅喉無異

諸根悅豫

生理機能神経系統分泌作用調節

腺の化學的活動の影響を及す分泌

分泌液 生成 制止
増加 減少

適當均衡 有機體の要求に應じ
活動力を調節

神経系統とホルモン

ホルモン 血液中循環特殊
化學的成分

血中にありて臟機固有作用を爲すに缺く可らざるもホルモンを生成す可き内分
泌腺を摘出せば生體危篤に陥る

一、副 腎

一種のホルモンを血液に供給す心臟及血管の不隨意筋の收縮を
促す交感神経の末梢を興奮し運動を鼓舞す

全身營養の調節神経を興奮する……

二、甲 狀 腺

神経系の高尙なる作用に缺くべからず（ソレイ）云く「人類の最
高力の成起及能作は分泌産物の純化學的作用に基くもの心理學
者此に注意せよ」

三、副 甲 狀 腺

肉食動物甲狀腺に包藏せらるる四個の針頭大の小體なれども分泌
液は神経系影響甚し
全部摘出せば死す

四、大 腦 下 垂 體

扁頭大 大脳底部に着す構造は腺より成立す 身體肥大前葉は
身體骨髓を成長を興奮すべき……生成す 後葉は副腎と同く心
臟器作用を收縮す

五、生殖腺内分泌

後葉液は或種の分泌を促す作用之にホルモンを注射する時は腎臟より尿多量に乳腺より乳大量に
特殊のホルモン鶏冠尾鬚等
ホルモンは蛋白質醱酵素より簡單なる有機化合物を……

中樞 (交感神經傳達 鼓舞) 心臟
(迷走神經傳達 抑制)

動脈管不隨意筋 收縮 血管内容血減すれば青白色
弛緩 血管内多量血液集潮紅

光顔巍々

腦髓神經統一機關調整

神經系統の發達に外部に感應する特質を有する神經
一に危險を避くる爲に二に營養を取る爲に外部より神經系に受て内と連絡するは是を知覺神經の小枝を外表に細脈に送り外部の刺激感應感受す
之に反して神經系より刺激を他に傳達するは遠心性
求心部、遠心部、中間部の三部の別を生ず是が全身を統一主宰する。人は一定の細胞が複雑なる機能を有する神經の巧妙に發達すること知力の作用に至つては正に其極に達す

世雄住諸佛所住

感情安住喜樂平和

佛陀安立大我、故不動、八風、故真、雄者

世間豪傑 肉欲我欲沈色 耽酒名利被執三軍叱咤 不真雄者

佛陀 真英雄、雄中雄、降伏自己、調御丈夫、常恒安住大我中故

佛陀 先在宮中色味中、見老病死、爲生死問題 苦悶懊惱入山學道

勤苦六年 降伏十魔 成最正覺

安住舍那大我、方坐蓮台、常樂我淨、四德莊嚴、自受法樂、常恒受用、十佛自境
是所安立、逆華藏界、常樂我淨、無住涅槃、常度生死
一切衆生 貧窮無福 轉輪六道 心無住處亦無心衣食 常飢 常寒 心無安時
天然人顛倒 空苦無常無我、中我樂我淨顛倒幸福主義還苦悶
初 佛陀教自己顛倒と世界依屬解脫を求
內外兩魔 解脫 自己能する處に非ず
如來 歸命 感情
融合 心情
安立 情操
是迄如來大我に安住 諸佛齊 如來大我
涅槃安住

世眼導師行 轉迷開悟 人生真理

佛陀 一切世間眼

世間 無明永夜 不明生死 不知涅槃光

人生觀 未來觀 宗教觀

天然人無學、故無知 學者還爲理性迷

天性無明先天 理性的見惑後天

見惑中 唯物論者 身見 細胞生命、電子生命等最巧妙說

邪見 撥無因果 無神無靈魂論

世眼佛陀 生死問題煩悶入山學道 問二仙解脫法 於佛樹下 朗然大悟得一切智

出世本懷一大事因緣 爲衆生 開示悟入

世英最勝道 意志 廢惡修善 人格 圓滿標準

佛陀所得道 最勝即無上菩提

彌陀、大道 即阿耨菩提 最高等道德

道者通=達至善地

人道 天道 聲聞道 緣覺道 無上道。六道輪廻 二乘偏地 無上道 眞實究竟地 永無退轉

世英者佛陀道德意志鞏固如金剛

衆生意志發達順序

初動物的生理衝動

次主我的意志 世俗情操 因、欲望

世界動機 緣、世名譽權利財產

人格形成因果

性、本不定意志(性具十界)因

善惡業造六道種子識を造る

靈格形成

願作佛心 靈的生命開發 願度衆生心

人格三位

非人格 三惡道 天性 二人格 理性 三靈格 靈性

昭和五年三月廿五日印刷
 同 廿八日發行
 年七册制は廢止
 年拾貳册 貳圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨成
 發行人 山崎 辨成

東京市小石川區諏訪町五五
 印刷人 小林七太郎
 電話小石川一四九五

發行所 東京市小石川區水道橋二ノ四四
 ミオヤのひかり社
 振替東京六六八五一番